

第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

中学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

適当スープ

大阪府
大阪教育大学附属池田中学校
2年 城田 佳穂

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「今日の夜ごはん何？」

「今日はねえ、〇〇とスープと……」

「ママの特製スープ？」

「そう。ママ特製のテキトースープ」

我が家の食卓には、よくスープが登場する。母の「特製テキトースープ」だ。中身は決まっていない。決まっているのは必ず野菜がたっぷりの具たくさんスープだということ。そして、これが毎回美味しく、私の楽しみのひとつでもあるということだ。

「ある日、母に尋ねたことがある。」

「適當スープってテキトーに味つけしてるん？ ちゃんとはかって作ってる良い意味の適當？」

「はかってないよ。いつものカンで。」

テキトーなのに、なんで美味しいんやろ……。

そもそも適當っておもしろい。適當なのにテキトーだったり、テキトーなのに適當だったりする。

私は、たまに「テキトーにしないで！」と注意されることがある。たとえば、部屋の片付けをしている時、山積みになっていた本やノートを自分なりに仕分けして横へ積んでいるだけに、それを見た母からは、「ちゃんと片付けなさい！」と言われてしまう。悲しいことに自分では適當と思っていたことでも、テキトーになってしまっているのだ。

一方で、夕食に作り置きするおかずができた時、「何か容器出して」とたのまれ、テキトーに一番手前にあった容器を出したところ「ちよūdいいいね」とほめられたことがあった。このように、テキトーに準備したつもりでも適當になつて、というとてもラッキーなケースもあるのだ。

適當とテキトー（適當）。同じ音、同じ漢字なのに良い意味にとらえられる時もあるれば悪い意味に用いられることもある。

適當を辞書で引くとちよūdよく合うことや、ふさわしいことと一番はじめに載っている。本来は、良い意味で使われるべき言葉のはずなのだ。ではなぜ、まったく真逆の意味でも使われるのだろうか。

調べてみると、軍事用語が発祥という説があるようだ。「装備品は適當か？」と上官が部下に尋ねた時、装備を忘れたことを隠すために「適當であります！」と返答してごまかしていたことから適當が「いい加減」という意味を含むように変化したというものだ。

しかし、私はこの説にピンとくるものがなく、どうも腑に落ちない。母が言うテキトーとは全くかけはなれたイメージしかない。なぜならば、母のテキトーには、何か温かさを感じるからだ。

母の作るテキトースープは「いつものカン」。そう「いつものカン」なのだ。それは毎日の料理で培われた経験からできているのだろう。母の頭の中に計量カップがあるかのように。

特別に意識しなくてもはかられている味つけなのだ。

母のテキトーは適当だったのだ——。そう思うと私はテキトーという言葉が好きになってきた。計算の上に成り立っているテキトーほど素晴らしいものはないと思えてきた。母はいつも「野菜はたっぷり摂ってね、野菜とお肉は八対二よ」とログセのように言っている。家族が自然に野菜をたくさん食べられるようにスープを作っていることが私にもわかる。ここに母の愛のあるテキトーがあったのだ——。テキトーであって適当である。テキトーは適当の中に含まれているかのような、なんとも温かな気持ちになる言葉なのではないだろうか。

そして今日も母特製の適当スープが食卓にある。やっぱり私はこの適当スープが大好きだ。